

# 日本語母語話者による程度強調副詞の使用実態

—「日本語話し言葉コーパス」調査より—

日暮康晴（筑波大学大学院生）

## 要 旨

本研究では「日本語話し言葉コーパス」を対象に、程度副詞「とても」とその類義語である「すごく」、「たいへん」、「ひじょうに」の音声タイプ及び年代別使用実態調査を実施した。調査には分類木分析を使用し、その結果、使用される音声タイプの傾向が語ごとに有意に異なることが明らかになった。特に、「ひじょうに」は客観的な情報が求められる状況で、「すごく」、「とても」は比較的くだけた状況での使用が多い。また、音声タイプ〔模擬講演〕内の年代別調査の結果からは、話者の年代によって使用される副詞に異なりが確認された。特に若年代は対人配慮に注目し、高年層になるにつれて講演というレジスター性に注目した語の選択を行う傾向にある。独話という共通環境でも、条件の異なりによって使用される語が異なるという観点は、学習者の個々の社会的状況に合わせた教育を目指す上で、初級段階からの教育内容の再整理の必要性を強く示唆するものである。

【キーワード】 程度強調副詞 程度副詞 コーパス 類義語 話者年代

## 1. はじめに

個々の日本語学習者（以下、学習者）の需要に応じた日本語教育の提供は、学習者の日本社会との関わり方が一層の多様化をみせる現在、重要度をさらに増している。文化庁が2021年に発表した『日本語教育の参照枠』においても、「学習者が置かれている様々な背景や社会的な状況に応じて、生活の中で必要な表現や話し方、漢字・語彙を学ぶ、仕事で求められる技能を優先的に伸ばすといったことが大切」（文化庁 2021 p.6）であることが述べられている。言語使用場面に応じた適切な教育活動を実施するためには、どのような場面でどのような文法形式や語、表現といった言語要素が選択されるのかといった情報の整理が不可欠である。本稿において「場面」とは、発話内容やあらたまり度など複数の要素によって成る総合的な言語使用状況を指す。

本研究では、副詞に注目する。副詞は、例えば雑談場面であれば「多分」、報告などのややあらたまった場面では「おそらく」のように、場面に応じて使い分けられ、学習者はそのような使い分けを学ぶ必要がある。しかし、日本語教育において副詞は教育内容として注目されることが他の文法項目に比べて少なく（大関 1993）、学習者

の産出データからも副詞の使用実態は母語話者のそれと異なることが報告されており(中俣 2016)、副詞の学習及び指導については未だ課題がある。

本稿では被修飾語の意味の甚だしさを表す副詞(以下、程度強調副詞と総称する)に焦点を当て、日本語母語話者(以下、母語話者)による使用実態調査を行う。日本語教育における程度強調副詞としては「とても」が代表的な立場にある。「とても」は、約半世紀の間多くの日本語教科書で初級段階の基本的な語彙として取り上げられている(大関 1993、朴 2019)。その一方で、程度強調副詞には「とても」の他にも「すごく」、「非常に」など多様な類義語が存在する。辞書などではそれら類義語の異なりは意味的な点でなく語の印象に注目して説明されることが少なくない。近年では中俣(2016)、島崎(2019)など母語話者・学習者の副詞使用に注目した研究もなされているが、程度強調副詞間の使用実態の異なりについて具体的な調査・分析は未だ行われていない。多様化する学習・教育需要に合わせた教育内容整理のため、使用場面という観点からの母語話者による使用実態の調査が不可欠である。

加えて、本稿では話者の属性、特に年代にも注目する。「母語話者」と一括りにまとめられる中にも、話者の属性による言語使用の異なりが存在する。程度強調副詞は、より新しく、印象的な表現が求められることから、使用される語の移り変わりが激しい(日本語教育学会編 2005)。そこからは、使用場面の異なりに加え、母語話者の中でも年代による使用傾向の異なりが予想される。教育内容の議論にあたっては、ある表現の使用傾向が、特定の年代にのみ確認されるものなのか、あらゆる年代に共通して存在するものなのかという点についても注視する必要がある。

以上より、本稿では程度強調副詞について、場面及び話者の年代に応じた使用実態を大規模コーパスを使用した定量的な調査によって明らかにする。

## 2. 先行研究

本節では、日本語教育における代表的な程度強調副詞である「とても」を中心に程度強調副詞についての先行研究をまとめる。

程度副詞「とても」は被修飾語の程度の甚だしさを表す用法(以下、程度強調)を持ち、従来、主に話し言葉において「話者の直接的な気持ちの表現」(片山・舂井 2006 p.39)のために母語話者によって多用される副詞であると説明される(片山・舂井 2006)。しかし、近年の母語話者実態調査では、「とても」が常に母語話者によって多用される語ではないことが明らかにされている。本稿では中俣(2016)、朴(2017)、島崎(2019)、石川(2020)を取り上げる。

中俣(2016)は、日中skype会話コーパスを使用した調査を通して、学習者と母語話者とで「とても」の使用頻度に約8倍の差があること、母語話者は「とても」よりも類義語の「すごく」を使用することを明らかにした。母語話者による副詞使用傾向

の調査結果を受け、中俣（2016）は初級段階での「すごく」の教授可能性について言及している。同様に、学習者の「とても」頻用に言及した調査には朴（2017）がある。朴（2017）は教科書調査及び学習者・母語話者の話し言葉コーパス調査より、母語話者の「とても」使用は肯定用法（程度強調）と否定用法（不可能強調）とで概ね同量である一方で学習者の「とても」使用は肯定用法に偏っていることを明らかにした。さらに、学習者の「とても」使用実態が日本語教材の「とても」の取り上げ方に影響を受けていることを指摘した。石川（2020）は、国立国語研究所の『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』（I-JAS）調査より、中級学習者と母語話者とで「とても」の使用数が効果量（オッズ比）17.0と大きく異なっていることを示し、「とても」が中級学習者に過剰に使用される語であることを明らかにした。

以上の先行研究からは、母語話者と学習者の程度強調副詞使用には異なりがあり、学習者は主に「とても」を使用する一方で、母語話者は「とても」よりも類義語の「すごく」を使用する傾向にあるとまとめられる。しかし、上記の研究はいずれも雑談場面に注目した調査であり、その他の口頭産出場面での使用実態は明らかになっていない。同じ口頭産出でも、たとえば雑談場面と学会発表では使用される言語内容は異なる。教育内容への応用を目指すにあたっては、より多様なデータを対象とした調査によって、より詳細な使用実態の分析・整理が求められる。次に示す島崎（2019）は、タスク（発話場面）別の副詞の使用傾向の異なりに着目して分析を行っている。

島崎（2019）のI-JAS調査からは、漫画ストーリーの口頭再生タスクであるストーリーテリング及びアルバイト先の店長役との会話タスクであるロールプレイにおいて母語話者の「とても」使用が確認された。「とても」の使用について、島崎（2019）は「話し言葉で『とても』を使うと程度の甚だしさだけでなくフォーマルな場面での丁寧さが出てくる」（島崎 2019 p.80）と分析し、「とても」の持つ「冷静さを帯びた表現」（島崎 2019 p.80）という要素がそのような使い分けに関与していると述べた。ここからは、場面の異なりに応じた語の使用実態の調査の必要性が示唆される。「とても」に加え、その類義語の使用実態を場面の異なりに応じて比較・検証することで、より具体的にそれぞれの語の使用実態を明らかにすることが可能となるだろう。

さらに、先行研究では「母語話者」とまとめられるものの、その中でも属性によって言語使用傾向は変わり得る。中俣（2016）では母語話者による「すごく」頻用が指摘されたが、従来「すごく」はくだけた語とされる（飛田・浅田 2019）。中俣（2016）の結果は調査対象話者となった大学生という年代も「すごく」の産出の多さに影響していたことが予想される。なお、本稿で使用する語の使い分けに関わる要素は石黒（2015）を参考とし、「あらたまっている／くだけている」の区別は相手への待遇的配慮に関わる軸として扱い、文体的・テキスト言語学的側面、つまり発話場面のレジスターに関わる軸としての「かたい／やわらかい」とは区別して使用する。

以上より設定した本研究の研究課題は以下の通りである。

【RQ1】母語話者口頭産出における程度強調副詞の使用傾向は場面によって異なるか。異なりがあるとしたら、どのような異なりか。

【RQ2】母語話者による程度強調副詞の使用傾向は、年代の異なりに応じて異なるか。異なりがあるとしたら、どのような異なりか。

以上2つの研究課題に対して、母語話者コーパスを用いた実態調査を行う。調査を通じて程度強調副詞の使用実態に即した情報の整理を行い、教育内容に関する今後の議論への一助となることを目指す。

### 3. 調査手続き

#### 3.1 調査語彙

本研究では程度強調副詞「とても」に注目し、さらにその類義語として「すごく」、「たいへん」、「ひじょうに」の3語を調査対象語とした。これらは程度強調という意味において共通しており、使い分けは主にあらたまり・かたさの2軸によって説明される(飛田・浅田 2019)。また、この4語は朴(2019)によって現行の主な初級日本語教科書での登場が確認されており、研究結果を日本語教育内容へ応用してゆく上で基礎的な議論を行うにふさわしい語であるという理由から選定した。

#### 3.2 使用コーパス及び音声タイプの詳細

国立国語研究所の「日本語話し言葉コーパス」(以下、CSJ)を使用した。CSJは総時間数661.6時間の音声データで構築された大規模日本語話し言葉コーパスである(国立国語研究所 2006)。CSJは独話環境の音声データを中心に構築されており<sup>1)</sup>、収録データは話される内容やその場のあらたまり度、話者の年代など、場面の構成要素によって区別され、個々のデータの場面の異なりは音声タイプ(後述)のタグ付けによって分類される。CSJ内の音声タイプごとの副詞使用数やその傾向を集計し比較・分析することで、場面の異なりに応じた副詞の使い分け実態の解明が期待される。

本研究では、CSJの独話データを分析対象とする。また、母語話者の自然発話を研究対象とすることから、書き言葉テキストの朗読である「朗読」及び音声を書き起こしたテキストの朗読である「再朗読」は調査対象としない。以下、調査対象とする音声タイプの詳細について国立国語研究所(2006)、籠宮(2015)を参考にまとめる。

独話データは理工学、人文、社会分野の学会発表である「学会講演」(以下、[学会講演]、総語数3,299,268語<sup>2)</sup>)、一般協力者による日常話題についての講演である「模擬講演」(以下、[模擬講演]、総語数3,636,771語)、研究機関や専門家による講演・講義である「その他の講演」(以下、[その他講演]、総語数282,800語)の3種類に分けられる。[模擬講演]は「なるべく講演者がリラックスした状態で収録に臨め

るようにさせた。また、収録スタッフは講演の最中にもうなずくなどして、講演しやすくするようにさせた。」(籠宮 2015 p.2) のように話し手である講演者の緊張感を取り払う試みがなされており、実際の講演実施の様子についても「発話スタイルは概して学会講演よりもくだけたもの」(国立国語研究所 2006 p.4) だったことが報告されている。

### 3.3 データダウンロード及び用法分類

本調査ではコーパス検索ツール「中納言」(国立国語研究所)を使用した。「中納言」内の「日本語話し言葉コーパス」ページにて調査対象語それぞれの語彙素(「凄い」、「大変」、「迫も」、「非常」)による検索を行い、それぞれの検索結果をダウンロードした。語彙素検索では同じ語の異形態とされるもの(例:「すごい」、「すごく」、「すごい」、「すんごい」等)が検索結果として一括して表示されるが、本研究ではすべてを用法分類及び集計の対象とした。

以上の手順でダウンロードしたデータに対して、収録されている用例のそれぞれがどのような用法で使用されているかの分類を行った。まず、筆者が全用例の用法を確認し、分類を行った。用法は、それぞれ「すごく」が〈程度強調〉・〈形容詞〉・〈名詞〉・〈メタ〉<sup>3)</sup>・〈不明〉、「たいへん」が〈程度強調〉・〈形容詞〉・〈名詞〉・〈メタ〉・〈不明〉、「とても」が〈程度強調〉・〈不可能〉・〈メタ〉・〈不明〉、「ひじょうに」が〈程度強調〉・〈形容詞〉・〈連体詞〉・〈メタ〉・〈不明〉である。用法分類の客観性を確保するため、同データの全用例に対して、筆者による用法タグに「それ以外」を加えた選択肢を用いての用法タグ付けを協力者A(日本語母語話者、日本語教師経験あり)に依頼した。協力者Aのタグ付け結果において調査対象語の4語いずれにも「それ以外」の付与はなかった。筆者と協力者Aの判断の一致率を示すカッパ係数の4語平均値は  $\kappa = 0.91$  であり、十分に高い一致率を得られたと判断したため、一致したデータについてはその用法分類を採用した。さらに、筆者と協力者Aとでタグ付けが一致しなかったデータについて、協力者B(日本語母語話者、日本語教師経験あり)に協力者Aと同様の手順でタグ付けを依頼した。協力者Bの判断はすべて筆者もしくは協力者Aの判断のいずれかと一致したため、協力者Bの判断を採用した。以上の手続きを通して、全用例に対する用法のタグ付けを行い、集計した。集計結果を以下表1に示す。

表1 独話データ内、調査対象語用法別集計数

	程度強調	不可能	形容詞	名詞	連体詞	メタ	不明	合計
すごく	5907	-	651	1	-	7	1	6567
たいへん	838	-	986	11	-	3	0	1838
とても	2945	189	-	-	-	11	0	3145
ひじょうに	6925	-	33	-	28	1	2	6989

※「-」は当該用法が存在しないことを指す。

### 3.4 分析の流れ

本研究では分類木分析を実施した。分類木分析とはカイ二乗検定をベースに独立変数から目標変数（質的変数）の予測を行う分析手法であり、同手法を用いた研究に大和（2019）などがある。分析の結果は有意差に従い樹形図として表示され、有意差がある場合には独立した枝分かれを示す。使用ソフトはIBM社のSPSS ver.28.00である。

まず、RQ1の解明のために音声タイプ別の調査を行った。調査対象語それぞれについて3つの音声タイプを従属変数とし、使用実態を分析した。

次に、RQ2の解明のために話者の年代と副詞使用数の関連を調査した。調査には先の調査と同様に分類木分析を使用した。この調査ではCSJにおいて最も多くのデータ量を占める音声タイプ〔模擬講演〕のみを調査対象とした。また、CSJでは話者の年代は「20-24歳」、「25-29歳」のように5歳刻みでタグ付けがなされている。本研究では「20-24歳」と「25-29歳」を合算して「20代」とするように10歳ずつの単位とした。各年代の総人数および産出総語数は、20代が497名1,045,019語、30代が371名808,869語、40代が283名623,705語、50代が279名591,975語、60代が277名555,518語である。10代、70代、80代については調査対象語の使用が少ないもしくは確認されなかったため、分析対象からは除外した。以上の条件で、各調査対象語を従属変数として分類木を出力し、それぞれの年代による副詞の使用実態を分析した。

## 4. 結果

### 4.1 音声タイプ別の副詞使用数

調査対象語のうち〈程度強調〉用法の音声タイプ別使用数を表2に示す。上段には集計された実数（粗頻度）を、下段には調整頻度として音声タイプごとに算出した100万語あたりの使用数（WPM）を記す。図1には分類木（相対リスク：0.233）を示す。

表2 音声タイプ別副詞使用数

		学会	模擬	その他	合計
すごく	粗頻度	135	5706	66	5907
	WPM	40.9	1569.0	233.4	818.3
たいへん	粗頻度	211	567	60	838
	WPM	64.0	155.9	212.2	116.1
とても	粗頻度	96	2809	40	2945
	WPM	29.1	772.4	141.4	408.0
ひじょうに	粗頻度	2809	3655	461	6925
	WPM	851.4	1005.0	1630.1	959.3
合計	粗頻度	3251	12737	627	16615
	WPM	985.4	3502.3	2217.1	2301.6

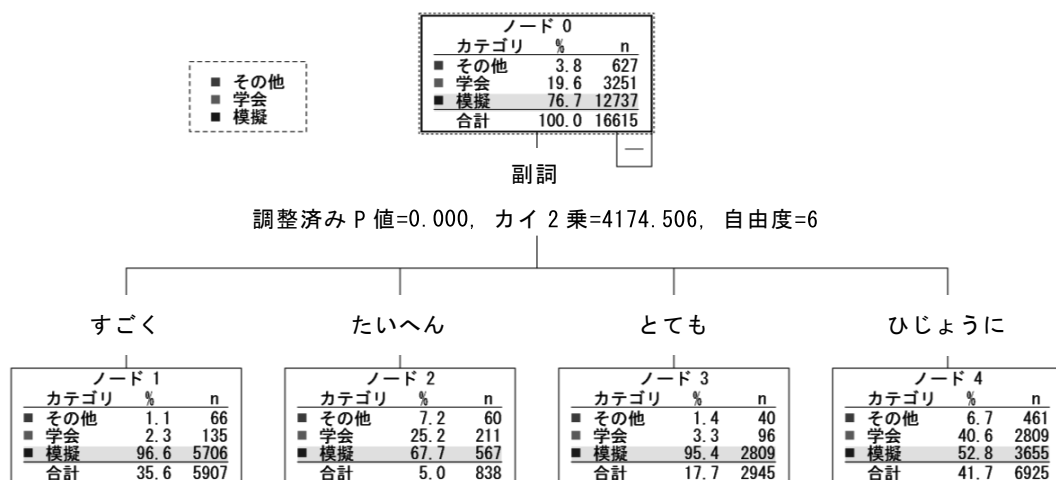


図1 音声タイプ別副詞使用傾向概要図（分類木）

表2に示した結果より、CSJ内の独話データ全体では「ひじょうに」、「すごく」、「とても」、「たいへん」の順に使用が多く、音声タイプ、つまり発話場面別の使用傾向は副詞によって異なる傾向を有することが分かる。さらに、図1の分類木分析の結果からは、各語の使用傾向が有意( $\chi^2(6) = 4,174.506, p < .001$ )に異なることが示されている。

「ひじょうに」は今回調査対象とした副詞の中で最も多く使用が確認された。調整頻度(WPM)を確認すると〔その他講演〕での使用頻度が最も高く、〔模擬講演〕、〔学会講演〕と続く。同様の頻度順は、使用数は少ないものの「たいへん」にも確認される。ただし、「たいへん」と「ひじょうに」の間には音声タイプによる使用率に異なりが見られた。特に〔学会講演〕における使用率が「ひじょうに」は使用率40.6%であったものの「たいへん」は同25.2%と、大きく異なっている。

「すごく」、「とても」は「たいへん」、「ひじょうに」と異なり、両者ともに〔模擬講演〕、〔その他講演〕、〔学会講演〕の順に多く使用が確認された。「すごく」と「とても」の間に使用率について大きな異なりはないが、実際の使用数に異なりが見られた。「すごく」はいずれの音声タイプにおいても「とても」に比べおよそ1.5～2倍多く使用されている。「すごく」が特に多く確認された〔模擬講演〕では、「たいへん」、「ひじょうに」を含めた調査対象語の中で最も高頻度に使用されている。

## 4.2 話者年代別の副詞使用数

次に、話者の年代別に各語の使用数を表3に示す。上段には語を使用した人数（異なり人数）、中段には実際に集計された使用数の実数（粗頻度）、下段には各年代別の総語数より算出したWPMを記す。列タイトルに示した人数は各年代の総人数である。また、同データより作成した分類木（相対リスク：0.481）を図2に示す。なお、10代のデータは他の年代に比べ話者数・データ数が顕著に少ないことから、表3に使用数を示すに留め、分類木分析は20代～60代のデータを対象に実施した。

表3の結果より、年代によって副詞の使用傾向が異なることが明らかになった。また、図2に示した分類木より年代（20代～60代）別の使用傾向がそれぞれ有意（ $\chi^2(12) = 2,423.501, p < .001$ ）に異なることが分かる。

調査対象語のうち特に大きな変化を見せるのは「すごく」である。10代の結果において、「すごく」の調整頻度はおよそ12,000回と突出して多く、副詞別の使用率はおよそ90%と、高頻度で、かつ集中して使用されている。ただし10代のデータの有意差は不明であり、さらに、話者数は全体で5名、「すごく」使用者は2名と他の年代に比べ少ないことから、個人的な使用の偏りの影響も否定できない。「すごく」の使用は、20代でも使用率68.4%（調整頻度3,151.1回）、30代で39.1%（1,351.3回）と下がり、60代では16.5%（442.8回）となっている。一方で別の3語はいずれも使用率が上昇傾向にある。特に「ひじょうに」は10代で使用が確認されず、60代になると過半数（55.4%）を占めるようになっており、使用増加が顕著である。年代別の副詞使用率は40代で「ひじょうに」が1位となる。「とても」は使用率において10代から50代に至るまでの間は上昇傾向を見せるものの、60代で減少している。「たいへん」は4語の中で最も使用率が低い（全体使用率4.5%）ものの、高年層になるに従って使用率の高まりを見せる。最高は50代の9.8%である。



表3 〔模擬講演〕内話者年代別副詞使用数

	10代 (5名)	20代 (497名)	30代 (371名)	40代 (283名)	50代 (279名)	60代 (277名)
使用人数	2	127	85	64	59	43
とても 粗頻度	8	823	682	451	530	315
WPM	1095.1	787.5	843.2	723.1	895.3	567.0
使用人数	5	176	106	65	47	45
すごく 粗頻度	87	3293	1093	636	351	246
WPM	11909.7	3151.1	1351.3	1019.7	592.9	442.8
使用人数	3	121	77	68	60	66
たいへん 粗頻度	2	128	99	68	167	103
WPM	273.8	122.5	122.4	109.0	282.1	185.4
使用人数	0	75	80	45	52	46
ひじょうに 粗頻度	0	568	919	688	655	825
WPM	0.0	543.5	1136.2	1103.1	1106.5	1485.1

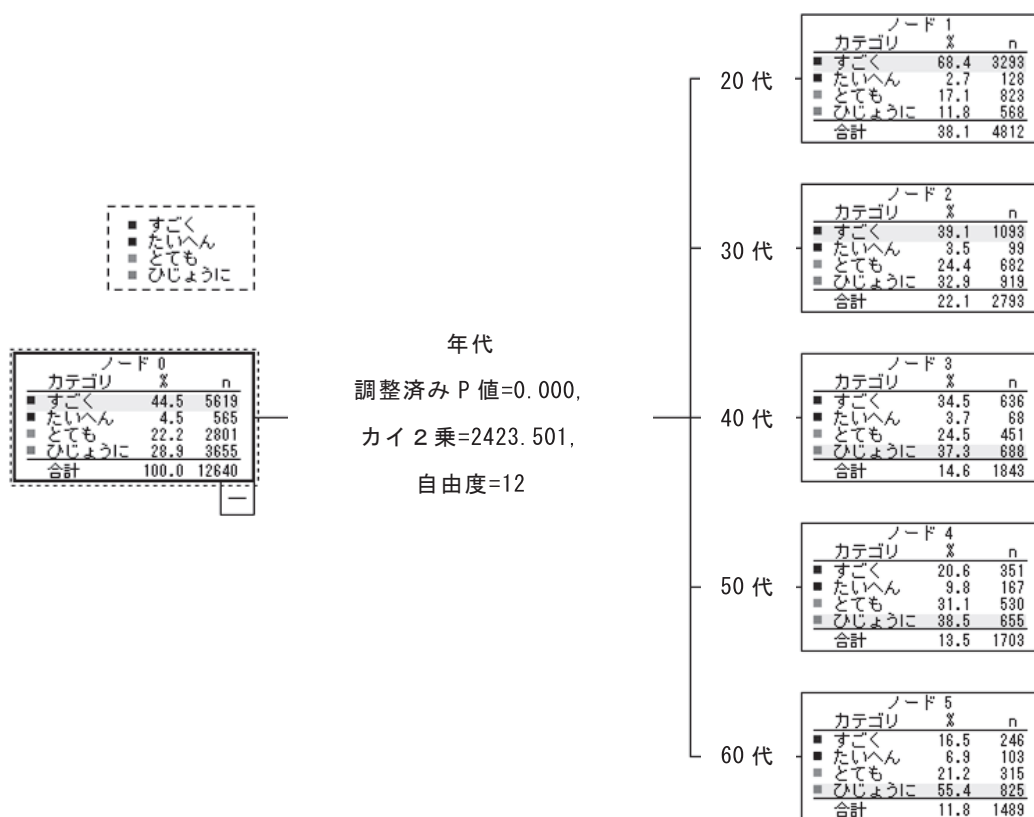


図2 年代別副詞使用傾向概要図（分類木）

## 5. 考察

### 5.1 音声タイプ（場面）別の副詞使用

4.1節に示した結果より、調査対象とした程度強調副詞は、独話という共通環境においてもその中の条件によって使用傾向に異なりがあることが明らかになった。本節では、まず、音声タイプ別の程度強調副詞というカテゴリそのものの使用傾向について考察し、次いで、副詞ごとの使用傾向について考察する。

表2に示した結果からは、音声タイプによって程度強調副詞そのものの使用頻度が異なることが分かった。最も使用頻度が高いのは〔模擬講演〕であり、次いで〔その他講演〕、〔学会講演〕と低くなる。ここからは、学会発表という場で語られる内容が厳密さを要求するため、話し手の主観的な判断による程度強調表現そのものが比較的使用されにくいことが考えられる。一方で〔その他講演〕は〔学会講演〕と同じく専門家による専門内容についての独話環境ではあるものの、「話者と聞き手の関係が専門家と一般聴衆の関係である」(国立国語研究所 2006 p.4)という点から、あらたまり度という点において語の選択は維持されるものの、聞き手に分かりやすく伝えるために厳密さよりも分かりやすさを優先した結果、程度強調副詞の使用抑制が弱化したと考えられる。〔模擬講演〕は3.2節で示したようにスピーチの内容が話し手自身に深く関わったものであり、かつくだけた雰囲気での実施であった。そのような場面において主観的な程度強調副詞表現に対する心理的抑制は比較的弱かったと推察される。

先に述べた、程度強調副詞そのものに関する場面（音声タイプ）別の使用傾向を踏まえた上で更にそれぞれの語について考察すると、「ひじょうに」は客観的表現が求められ程度強調副詞の使用が制限される場面でも比較的高頻度で使用されるように、独話環境で広く使用される語であると考えられる。「たいへん」も「ひじょうに」に似て〔学会講演〕、〔その他講演〕での使用割合が高く、「ひじょうに」と同様の使用傾向を持つと考えられるが、使用頻度と併せて考えると、今回の結果からは〔その他講演〕、〔学会講演〕での使用頻度が高いというよりもむしろ〔模擬講演〕での使用頻度が低い、つまり、独話の中でもくだけた場面では使用されにくい語であると推察される。

「すごく」、「とても」の使用は、「すごく」の使用頻度の方が「とても」よりも高いという頻度の差もあるが、共通して〔模擬講演〕に集中する。上述したように、当該音声タイプは比較的くだけた雰囲気での実施されたスピーチである。更に詳しくその場面を分析すると、内容が話し手自身に深く関わったものであり、スピーチにおいては話者がリラックスし、かつ、聴者も話者に対して反応を返すなど、独話という一方的な発話状況ではあるものの、話者による聴者の存在への意識が比較的強い状況であったと推察される。そのような状況の中で、聞き手に親しみを持ってもらえるような話し方をしよう、という対人関係への待遇的配慮が話者に生じ、その結果として〔学会

講演〕や〔その他講演〕とは異なる語の選択に結びついたと考えられる。

また、〔学会講演〕と〔その他講演〕の間の異なりは、副詞の使用頻度の差にも確認できる。〔学会講演〕での使用数対〔その他講演〕での使用数の比率が「ひじょうに」が約1:2、「たいへん」が約1:3:3となっているのに対し「とても」は約1:5、「すごく」は約1:6と、〔その他講演〕での使用数が比較的多い。ここでも、「すごく」、「とても」は単に専門的な内容を伝達するだけでなく、それを聞き手に分かりやすく伝える上で、話し手個人から眼の前に存在する聞き手への、待遇的働きかけのために使用されると考えることができる。ただし、「すごく」は〔その他講演〕でも比率こそ低いものの使用頻度では「ひじょうに」に次いで多く使用されている。ここからは、「すごく」は独話環境においても程度強調副詞が使用できる場面であれば使用されることが示唆される。

## 5.2 年代別の副詞使用傾向

### 5.2.1 年代別の副詞使用傾向

〔模擬講演〕を対象に行なった年代による副詞使用傾向の調査結果からは、「すごく」の使用は使用頻度・割合共に若年代において顕著に高く、年代が上がるにつれ低下すること、反対にその他の3語「たいへん」、「とても」、「ひじょうに」は年代の上昇に従って使用割合が上昇することが明らかになった。ここでは、相手への待遇的配慮に基づく「あらたまり／くだけ」の軸と、その場面における言語活動に注目したレジスター的な軸である「かたい／やわらかい」の軸の対立に注目して、副詞の使用傾向の異なりを考察する。

〔模擬講演〕は、スピーチという、ある程度の「かたさ」が求められる場面であるが、同時に他の独話場面よりもくだけた雰囲気であった。10代、20代の若年代は独話環境というレジスター性よりも聞き手への近接的な表現の選択を優先し、比較的くだけた「すごく」を選択していると考えられる。一方で、年代の上昇に従って、その場の雰囲気だけでなく、その場が独話環境であるというレジスター的な面に対する注目も高まり、それが、「独話環境にふさわしい」語を選択する意識、つまり「すごく」使用の抑制およびそれ以外の語の使用増加に結びついたと考えられる。ただし、「たいへん」、「とても」、「ひじょうに」の使用の増加具合には異なりも確認される。「ひじょうに」は年代が上がるにつれ使用が顕著に上昇するが、「たいへん」は比較的上昇の幅が低い。ここからは、たとえ独話環境であっても、くだけた場面と認識される場合「たいへん」は全年代を通してあまり使用されない傾向にある、つまり、「たいへん」は「あらたまり／くだけ」の軸が使用要素として強く関わっており、特にくだけた場面では概して使用が少ないことが示唆される。一方で、「ひじょうに」は独話環境であれば「あらたまり／くだけ」に関わりなく使用されると考えられる。ま

た、「とても」の使用頻度はこれら2語の中間程度であった。全年代を通じて一定数使用はなされているものの、片山・舛井（2006）の述べる「多用される」（片山・舛井 2006 p.50）語であるとは言い難い。島崎（2019）の述べるように「とても」の「フォーマルな場面での丁寧さ」（島崎 2019 p.80）が独話環境というレジスター性に合致するとみなされ、30代以降の使用頻度の高さに結びついていると考えられるものの、それはあくまでも「とても」のみに注目した特徴でしかなく、同場面での使用を考えると「ひじょうに」、「すごく」の方が頻用される語であると言える。ただし、反対に言えば「とても」は「すごく」ほどくだけた印象もなく、「ひじょうに」ほどあらたまっている語でもない、あらゆる年代に満遍なく使用される中庸の位置にある語と言えるだろう。

### 5.2.2 副詞の用法について

結果より、「すごく」と「ひじょうに」の年代別使用頻度は対称的な変化を見せるものの、実際の用例を確認すると使用のされ方にやや異なりがある。「ひじょうに」は「非常にこのおー浄化作用おーということであーま大きな影響をおー及ぼしているのではないのかなとーいうことであーございます」（独話・模擬、60代）のように別の句が挟まることもあるが、基本的には修飾される語に向けて使用されている。一方で、「すごく」は「クラス全員凄く仲良くてて食堂とかでも凄い全員が一列に座って御飯を食べたり回したりとかして凄く楽しいクラスでした」（独話・模擬、10代）のように、発話の中に散りばめるように発話される例が確認された。これは、被修飾語を修飾する従来の程度副詞としての用法が、発話内容全体を強調する、言わばディスプレイコース・マーカー的な用法に拡大したものと捉えられる。また、これは10代、20代などの若年層のみに見られる現象ではなく、例えば「凄く構内もうその鳥の糞のにおいがある来て凄く臭かつ臭かったのよとか」（独話・模擬、60代）のように60代の話者の発話でも確認される。本研究では被修飾語の分析は行わないためこれ以上の詳細な実態については明らかにできないものの、語の選択だけの問題に限らず、それをいかに用いるかという点においても今後の課題として検討の余地があると考えられる。

## 6. まとめと日本語教育への示唆

本研究では、日本語母語話者による程度強調副詞の使用実態について、母語話者話し言葉コーパスのCSJを用いて「とても」、「すごく」、「たいへん」、「ひじょうに」を対象に調査を行った。その結果より得られた研究課題への回答は以下の通りである。

**【RQ1】** 母語話者口頭産出における程度強調副詞の使用傾向は場面によって異なるか。異なりがあるとしたら、どのような異なりか。

**【RQ1への回答】** 調査対象とした副詞全てにおいて、場面ごとの使用傾向が有意に異なっていた。「ひじょうに」は最も多く使用され、学会発表や専門家による講演と

いった場面で特に多く使用される傾向にある。「たいへん」は使用頻度は最も低く、「ひじょうに」と同様の傾向を示した。「すごく」、「とても」は学会発表や講演での使用は比較的少なく、反対にくださったスピーチ場面での使用が多い傾向にある。

**【RQ2】** 母語話者による程度強調副詞の使用傾向は、年代の異なりに応じて異なるか。異なりがあるとしたら、どのような異なりか。

**【RQ2への回答】**〔模擬講演〕の調査によって異なりが確認された。「すごく」は年代の上昇に従って使用率が下がる傾向にあり、他の3語は高年層になるに従い使用が増える傾向にある。ただし、後者は語によって上昇の幅や使用頻度が異なり、「ひじょうに」は顕著な上昇傾向を見せるが、「とても」はやや弱い上昇傾向、「たいへん」はほぼ横ばいである。年代による異年りの要因として若年代はくださった場という相手への待遇的配慮に注目し、年代が上がるにつれ、待遇的配慮に加え、その場が独話環境であるというレジスター的要素への注目が高まることが挙げられる。

本研究は、一度のデータ収集によって構築されたコーパスを元にした横断的な調査である。〔模擬講演〕では10代・20代による相手への待遇的配慮という面からの「すごく」使用が多いという結果が得られたが、元々「とても」の程度強調用法も不可能用法のみの語から派生して生まれ出でた、やはり言葉的な用法である（播磨 1993）。本研究の結果も、絶えず変化する言語使用の瞬間的な姿に過ぎない。横断的調査に加え、縦断的な調査を行うことで、程度強調副詞使用の変遷についてより深い考察が可能となるだろう。また、本研究で取り扱ったデータの中で、10代話者のデータは他の年代話者に比べ数が少なく、分類木分析による分析対象外となり、有意差を確認することはできなかった。さらに、本研究で取り扱った10代話者のデータは話者5名によるものであり、個人の副詞使用の傾向に左右されている可能性も否定できない。日本語学習者の中には初等・中等教育機関などで学ぶ10代の学習者の数も少なくない。同年代の母語話者とのコミュニケーションのための日本語学習を希望する学習者の需要に応えるためには、10代母語話者のデータを対象としたより大規模な定量的調査・分析も必要となるだろう。

本研究では、日本語母語話者による類義語の使用傾向がコミュニケーションの場面に応じて変わり得ることを明らかにした。本研究で得られた結果からは、独話環境であれば「ひじょうに」を使用すれば問題はないが、聞き手に親しみを持たれやすい話し方を望む場合は「すごく」の方が効果的であるといったように、学習者に対して使用場面に応じた語の選択・使用についてのアドバイスの必要性・有効性が期待される。無論、行き過ぎた母語話者至上主義は避けるべきであるが、日本語能力の向上を目指す学習者に対し、母語話者がいつ・どのような場面でどのような言葉遣いをするのかという情報を整理し備えておくことは、日本語教育を提供する側の責務であろう。また、日本語教育内容についての議論を行う際には、言語使用実態は常に変化し続けて

いるということを念頭に置いた上で「今、どのような場面であるか」という観点に沿った情報整理も必要とされる。

学習者はそれぞれが1人の社会的存在であり、彼らが使用する日本語はその場の雰囲気や相手など場面を構成する様々な要素において変わりうる。それは、文化庁(2021)が示すように、今後の日本語教育において優先的に考えなければならない要素となる。コミュニケーション場面に応じた適切な教育内容の整理を目指す動きには、野田(2005)に代表される「日本語教育文法」があるが、今回の調査から明らかになった「場面による語の使用傾向の異なり」という観点は、文法のみならず、語彙という観点からも、初級段階からの教育内容の再整理の必要性を強く示唆するものであると考えられる。本研究で調査に使用したCSJは独話環境での発話データが中心となっており、本調査で得られた結果も独話環境に限られたものとなった。今後は対話環境にも範囲を広げ、調査を進めていきたい。

## 注

- 1) CSJ(総時間数661.6時間)において独話データ(朗読・再朗読除く)は628.4時間、対話データは12.2時間である。
- 2) 各音声タイプ別の総語数は『『日本語話し言葉コーパス』語数表(Version 201803)』を参考にした。
- 3) 〈メタ〉とは、「とつてもという副詞にはこの僕めという文節は係れない」(独話・学会、20代)のように、話題の中でメタ的に取り上げられているものを指す。

## 参考文献

- 石黒圭(2015)「書き言葉・話し言葉と『硬さ／軟らかさ』—文脈依存性をめぐって—(特集 ことばの「硬さ」「やわらかさ)」『日本語学』34-1、14-24
- 大関真理(1993)「日本語学習用教科書の副詞語彙」『言語文化と日本語教育』5、23-34
- 籠宮隆之(2015)「音声収録作業の概要 Version 1.1」国立国語研究所・情報通信研究所機構『『日本語話し言葉コーパス』付属マニュアル』
- 片山きよみ・舂井雅子(2006)「初・中級レベルの日本語教育で教える程度副詞—とても・大変・非常に・すごく・ひどく・本当に—」『熊本大学留学生センター紀要』9、25-53
- 国立国語研究所(2006)「日本語話し言葉コーパスの構築法」国立国語研究所『国立国語研究所報告』124
- 島崎英香(2019)「話し言葉における日本語学習者の副詞の使用実態—I—JASを用いて韓国語話者を中心に—」『日本語・日本語教育 = Journal of Japanese language and Japanese language teaching』3、65-84
- 飛田良文・浅田秀子(2019)『新装版 現代副詞用法辞典』東京堂出版

- 中俣尚己 (2016) 「学習者と母語話者の使用語彙の違い—『日中 Skype 会話コーパス』を用いて—」『日本語／日本語教育研究』7、21-34
- 日本語教育学会編 (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店
- 野田尚史 (2005) 「コミュニケーションのための日本語教育文法的设计図」野田尚史 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版、1-20
- 朴秀娟 (2017) 「『とても』における日本語学習者と日本語母語話者の使用実態の違い—話し言葉を中心に—」『日本語／日本語教育研究』8、101-121
- 朴秀娟 (2019) 「初級日本語教科書における副詞の導入実態について」『神戸大学留学生教育研究』3、21-34
- 播磨桂子 (1993) 「『とても』『全然』などにみられる副詞の用法変遷の一類型」『語文研究』75、11-22
- 文化庁 (2021) 『日本語教育の参照枠 報告』[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93736901\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93736901_01.pdf)
- 大和祐子 (2019) 「日本語学習者の二字漢字語の書字認知の特徴—非漢字系学習者と漢字系学習者の比較から—」『日本語・日本文化』46、21-45

## 使用コーパス

国立国語研究所『日本語話し言葉コーパス』『中納言』2.4.2 データバージョン2018.01 (2020年12月19日ダウンロード)

## 使用データ

国立国語研究所コーパス開発センター「『日本語話し言葉コーパス』語数表 (Version 2018 03)」(2022年10月26日ダウンロード)

## 謝辞

この論文は第31回小出記念日本語教育学会年次大会(2022年6月25日)における口頭発表「程度副詞『とても』の使用実態—『日本語話し言葉コーパス』調査より—」(発表者:日暮康晴)の内容を元に、新たな分析を含め大きく加筆修正を行ったものです。発表の場、また、本稿執筆においてコメントを下された皆様に御礼申し上げます。本研究は、2021年度尚友倶楽部筑波大学日本語教育研究者育成奨学金およびJST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2124の支援を受けたものです。